

大蟲宗岑禪師讚仰

松 田 奉 行

勅諭無任妙德禪師大蟲宗岑大和尚の經歷は、光嚴十七世泰友和尚の「大蟲大和尚略行狀」と雲巖二十世禪雄和尚の「中興開山碑」文によつてその大體が知られる。前者は柴田慈孝師が正法輪昭和十三年七月號に發表された。

禪師は常州の人、永正九年生、小田巢月院濟榮を拜して薙髮、長じて足利學校文伯の講筵に侍し周易莊子等を聽き儒典史書を博涉したが、次いで相州本光寺大室、駿州臨濟寺大原、清見寺月航に歴參、遂に勢州白子龍源室内江南の爐鞴に入つて六歳、弘治二年得法、大蟲の道號頌を頂いた。

此は宗門老於菟、爪牙備處自班々、一聲高嘯南山月、凜々威風不可攀。

江南時に七十六の高齡、禪師亦不惑を超ること五つ、間もなく故郷に却回したものと思はれる。總州矢作城主平胤憲の歸依を受け、法兄濟庵の席を繼いで寶雲山大龍寺に住したが、永祿五年寺が兵燹にかゝつた頃から流浪の生活が始り常總を去つて遂に會津興德寺に留つた。外護は芦名盛興である。留ること五秋螢、胤憲の敦請辭し難く再び雲山に歸住した。時に永祿十二年である。元龜三

年九月初五、奠を設けて江南の小牌を祖堂に安置して中興開山と稱した。延寶傳燈錄所載の如く天正五年十二月十二日朝の一夢、識となり、翌年十月、光嚴和尚の推挽によつて東山雲岩寺に移り、更に檀越藤原資胤の力で龍安月航始め本寺考宿の推奨を得、天正八年十二月二十三日宸翰拜受、翌年二月二十三日東山に於て之を頂戴した。「簾前賜紫好任他、我老生涯只一簑、無復飛騰雲路思、社盟苦結白鷗波。」禪師の平生が伺はれる。十三年四月瓜畎橋供養、九月開山圓滿常照國師三百年遠忌奉修、翌春二十八日、住山十年にして退山す。上堂の語に、「即今住山無來處、退院無去處」と唱へ暫く國師塔下にあつて自適の生活に入つたが、緇素に請はれて正覺山光嚴寺に住し慶長四年五月五日遷化された。遺偈は、

咄々我何物、八十八春秋、轉身端的底、火裡大蟲噉鐵牛、喝。

嗣子に、南叟、天外、乾峯、鐵岫、龍嶽、九山、心安あり、語録を長沙といつてゐる。

師は北條早雲相州進出の年に生れ、前田利家薨去の年に寂された。實に戰亂の中に生れ戰亂の中に育ち戰亂の中に學び戰亂の中に住寺した。師はかゝる世に處して永い一生を通じ焦らず弛まず、實に孜孜たる勉學を續けられたのである。師性篤實重厚、自ら叙して「栖芦鈍鳥、上升鮎魚、多年雖交儒門、愚蒙漢難記姓字、衰晚乍入禪室、可憐生未徹最初。」と謙遜されつゝ、三家村裡貪之一鉢裏の禪中、幾多の困難を排除して坡老の見解を學び愈氏の舊縁を睇つて作文作詩した。長沙錄の詩

文は殆んど全部永祿、天正兩年間のものであるが、壯年時代の勉學の模様伺へるものがあるので
摘出する。

野納幼年入利陽之杏壇遊學、惟時巒序之講主文伯先生、於傍開講席者二十餘輩、學侶五百餘人、
實一時盛事也、文伯翁被講莊子、予亦陪席末、暮春始之、蒞尾終之、

寺石正路氏は、「南學史」に、「足利學校藏書目錄の住持世譜によつて中興後の學長名を載せてゐるが、その第六世に文伯和尚、未詳性氏とある。ともかく、教授が二十餘人學生が五百以上とは仲盛んなものだ、講義の様子も想像がつく。禪師はその頃弱冠二十二の青年だつた。

爾來關左之騷屑八州如瓜潰、就中上下之野州、干戈叢裡、狼烟不斷、講堂焦土、詩書禮樂、悉化
秦灰、入境俱奪、儒學掃地盡矣、時之澆季、道之衰廢、換手搥胸而已、嗚呼纒師其跡者、存亦如亡
可惜許。

此は是、師七十七歲當時の感慨である。しかも九州より、畿内より遙々足利に遊學する好學な者も少くはなかつたらしい。

叔師の好學心は堅く天滿宮の信仰と結付いてゐる。恐らく弱年の頃から一生を通して尊崇されたものと見える。「菅君有遺廟、和雪一枝開、南北春無隔、五雲天上梅。」の詩の奇蹟やその和韻、並に正覺山鎮守天滿宮新營奉安拙語を見るならばその信心の程が知れやう。かくて悠揚迫らぬ真正直

な學問向上の努力に敬虔の念を生じないわけには行かぬ。師には虎哉のやうな才智がない。徳山の俊敏は虎哉のものであるが、瀉山の丕徳は師に屬する。僅かに十八の弱年での快川會下の首位となり碧岩を講じた少年上人と高齡六十七に及んで猶且「薄學淺識、不辨羊芋魚魯誤褫宗門第一書」と佛祖の明罰呵責を恐れる老僧とを對比するがよい。

師は貧乏に終始した。戦闘の習ひ、雲山も東山も兵火に塵灰と化した。塵灰と化する以前と雖も單丁乍住、貪處地荒無卓錫、忌辰何以報先師、拈來挿向江南物、這帳中香梅一枝の風流であり、夫東山天下名藍、今也有名無實、就中兵餘佛宇僧院之荒廢祖庭法窟之寥落、一々不堪記之、吁觸目者山雲溪月之幽趣、針耳者嶺猿野鹿之哀聲の境涯であつた。騷屑時のこと故、住居定まることなく、業風に吹かれて、破笠瘦藤只一蓑の生活である。

舉世乾坤旅泊津、可憐南去北來人、浮家泛宅更無定、又被風吹一葉身。
咄這浮雲流水身、隨波逐浪尙泥塵、利名勦業摠拋擲、薄福無能閑道人。

師は到處で貧病に取付かれたが、その爲め反つて道に富むことゝなられたやうである。

森羅萬象吾禪侶、圓覺伽藍古梵宮、雨後溪聲廣長舌、無聞無說自談空。
雲是此山先住主、半間分得寄藤床、嶺猿叫落岩房月、縱聽千聲不斷腸。

師は、鶏を飼ふたり、猫兒を吊ふたり、棄犬を養ふたりした、又、梅を植え石を愛し、書を論じ

墨梅を描き、友を訪ね或は文を綴り詩を作つて綽々たる餘裕を持つことが出来た。師は趣味の人である。が、本能寺の變の翌月即ち天正十年初秋下濔作の長詩五十餘韵の如き戰國時代騷屑の始終を述べて天下の英雄史上の豪傑を一狀に領過して、信長及其の周圍の人々を、「萬古不改東山月、一笑閱世北野梅」の立場から批判し去り、「宰相若識先車覆、可畏後車謾莫馳、左右輔弼人倫鑑、自今號令豈有私、」と戒め、「願言致君堯舜上、戶々封處闔國治、」と結んでゐる。師は飽く迄も權を去り「正」を求め、御皇室の御繁榮を願ふのである。

これは、師が單に正義の人たるばかりでなく寧ろそれ以上に徳者であつた證據ともならう。更に交友の情誼に之を見るがよい。虎哉にせよ、物外にせよ、祥山にせよ、幻室にせよ、鼎心にせよ、胤憲にせよ、楊臨川にせよ交友二十年乃至四十年七十年である。

天正九年佐竹に於て洞上と密宗との宗論があつた。師之を判じて、世尊の大慈悲、粉骨碎身も之を酬ひ難し、方袍圓頂の吾儂、佛衣を着し、佛經を誦し、佛語を唱へ、佛飯を喫する者は慚愧を忘れてはならない、當に貪欲の一念を去るべきである。自讚毀他戒を守ることが肝要なのだ。伏乞諸宗他弓莫挽、他馬莫騎、他非莫辨、他事莫知、他是阿誰、努力、諸人本佛遺戒各自守封疆、則諸宗之門葉宗枝日々繁茂、西飛佛日再發光輝といふのである。何たる寛仁大度であらう。

江南先師の入牌を行つて大龍寺を妙心末とした時の香語にも同じ態度が伺はれる。夫惟建仁者黃

龍末流、這妙心者松源之滴水、二派雖分涇渭、元來曹溪一滴、滔々激東海波瀾、到這裡、泛正法之鐵船、則創建大航和尚坐船頭執楫、中興江南老漢立船尾搖櫓、此岸彼岸運濟往來、上載下載度凡聖昨日妙心金翅、今日雲山黃龍、改頭換面應機接物、將謂東山法道未寂寥。人を立てることが出来て始めて自らも立てる。篤實寛厚師の如き、報恩謝徳に鞭打つ時、幾多の廢寺が極めて圓滑裡に轉派したものと見える。幾多の俊秀が貧を厭はずその膝下に蟄集したのも、これが原因らしい。師は才氣煥發の人といふよりも、豊かな氣長な心を持って困苦に甘んじ、田舎に住して、江湖散人、山居樵子の生活を樂み、大器晩成、高節を持して利に走らず、關左に蟠居して獨坐大雄峯、押すとも押されぬ天下の法將となつたものである。

先年報恩の志を遂げたく拜塔に出かけて、未庵大關安碩齊高増夫妻に永遠に歸依されつゝ光嚴寺の同じ墓域に御入定中なのを何よりも誰よりも美しく思つた。

(昭和一七、七、四)